

第6課

自然と人間

本文

■ 内山 節

季節

桜の花が咲くと花見にくりだしたくなるのは、どうやら日本人独特の習慣であるらしい。もちろんソメイヨシノは日本の木であるけれど、どここの国に行っても春にはその国を代表する樹々が美しい花をつける。といっても、私が行ったことのある国では、花の下で車座になって酒を飲んでいる人々などみたことはない。もっとも古代には日本でも、桜より梅のほうが宴の対象になっていたようだが、梅の季節ではまだ寒くて、昨今のようにひと騒ぎする気にはならなかったにちがいない。

日本人が花見が好きなのは、春になると魂が生き還ると考えていた、日本の伝統的な季節観と関係しているのではないかと私は思っている。この考え方では、人間の生命は山の樹々と同じようなサイクルをもっているとみなされていた。春になると人間の生命も生き還る。そして、生命が活発化する夏を迎える。秋はその命の衰退期である。冬は閉じた生命を細く維持していく時期である。

だから古代律令制の下では、罪人の処刑も晩秋におこなわれている。生命が閉じようとする季節に処刑することによって処刑された魂が生まれ還るのに支障のないようにしているのである。

子供のころ私は人間だけが、一年じゅう同じように働き暮らしていなければならないことに少なからぬ不満をもっていた。山の樹々は冬には活動をおかた休止させ、山の動物は冬眠に入るではないか。それなのに人間だけが一年じゅうほとんど変わらないリズムで働いているのである。なんとなく損な生き物に生まれたような気がしてならなかった。

だから山里を歩くようになったとき、私には解放感があった。山里にはま

た季節とともに暮らす人々がいた。春になって木や草や鳥や虫たちがいっせいに活動しはじめるさまは、まるで土や大気や水の中から命が湧きだしてくるかのようだ。そのころ山里の人々の活動も始まっていて、自然が生命活動を閉じる晩秋に山里は静寂を迎える。

もしかすると、こんな暮らし方を、文明の発達度が低い証というのかもしれない。文明の発達は、自然に制約されない人間の営みをつくりだしていく過程でもあったのだから。一年じゅう同じリズムで稼働する都市や工場の存在は、発達した文明の象徴でもある。そして実際には、山里でも自然に制約されない労働や暮らしの部分が拡大してきている。

別にそれを非難しようというのではない。人間が季節を克服していくのは、人間の自由だ。しかし私たちの背後には、季節とともにしか存在しえぬ自然の世界がある。そして人間は自然の恩恵を受けながら暮らしている。とすれば人間はどれほど文明を発達させようとも、かたわらで季節と共存し、季節としての時間の流れを引き受けなければならないのではないのか。

春になると息を吹き返し、秋にはその活動を縮小していく時間の流れ、もしそれを人間たちが引き受けなくなったら、おそらく自然は荒廃していくだろう。人間たちが自然を一年じゅう同じように扱ったら、自然は壊されるばかりである。

文明の発達度が低いほど、季節としてあらわれる一年の時間の流れと人間の暮らしが調和していたというのは、人間の歴史の皮肉でもある。いや、それ以上に人間たちはいまでは、季節という時間の流れを克服した自然をつくりだそうとしているのかもしれない。

一年じゅう青々とした芝の広がるゴルフ場、人工雪を降らせたスキー場、農業でも施設園芸が一般化し、もしかすると一年じゅう成長しつづける木もそのうち生みだされるかもしれない。自然の制約から抜けだそうとしてきた人間たちは、いま季節のない自然をつくりだしはじめたのかもしれないというような気さえするのである。

近代文明は四季があること自体を、めんどろなものとみなしてしまった。だから一年じゅう室温の変わらない工場をつくり、一年じゅう変わらない生活のリズムをつくりあげた。そしてそのことによって、私たちはしだいに自然を忘れていった。季節とつきあい、やりすごしながら、季節に助けられて暮らす生活を忘れることは、自然を忘れることである。

桜の花が咲くと私も花見にでかける。ソメイヨシノの華やかさに驚き、霞のように白く浮き上がるヤマザクラに足を止める。その桜の下で人々が花見の宴を盛り上げているのを見るのは楽しい。

この時ばかりは、まるで季節を克服しようとしてきた文明の歴史に抵抗するかのように、私たちは人間もまた季節とともに生きていることを実感する。

そして昔の人々と同じように、生命がわき上がってくる春を楽しむ。自然と人間の関係をつなぐもののひとつに、四季という時間の流れがあることを、そのとき私たちはあらためて再発見しているのである。

『山里紀行』による

ヤドカリ



ヤドカリ

10年ぐらい前の、僕にとってはひどく暇な夏の夜、道を歩いていく1匹のヤドカリを見つけたことがあった。道路の隅をセカセカと歩いては立ち止まり、ため息をつくようなそぶりを見せてはまた歩みを速めた。

たぶんデパートか夜店で売られたヤドカリが、飼われていた狭い水槽から逃げ出したのであろう。大通りを横切り路地

を曲がり、目的地に向かって一心に急いでいるようであった。どこに行こうとしているのだろう。後をついていった。

午前零時に東京の本郷を歩いていたヤドカリは、2時間後には湯島にさしかかっていた。その方角で歩いていけばまもなく上野、その先が浅草、そして東京湾に入る。そうか、ヤドカリは歩いて海に帰るつもりなのか。アスファルトの上でため息をつきながら、しかしその歩みは速かった。迎え入れてくれる海を目ざして、迷うことなく道を急いでいた。それはヤドカリの自由への逃走であった。

あの汚れた東京湾より、もう少しマシな海に連れて行ってやりたいと僕は思い始めていた。何度か躊躇した後で、そのヤドカリを拾い上げた。家に連れて帰った。自由への逃走を挫折させられたヤドカリは、ひどく落胆してしまったようであった。餌も食わずに箱の隅でしょんぼりしていた。

翌朝、朝一番の特急に僕はそのヤドカリを連れて乗った。汽車が海岸線に出てきて潮風が伝わってくると、まだ気落ちしていたヤドカリは、にわかに騒がしくなってきた。ありったけの力で僕に抵抗をした。千葉の館山で下車して洲崎行きのバスに乗る。以前によく行ったことのあった房総半島の突先の海岸に向かった。

海岸に立つと、夏の太平洋の香りの強い浜風が僕の衣服をバタつかせた。かつてよくサザエ取りに訪れた岩場まで来ると、ヤドカリは渾身の力をふり

しばって僕の手を押しひろげた。そうして岩の上へと飛び降りていった。体じゅうに波を浴びて、岩陰に隠れ去っていった。

僕は砂浜の落花生畑を横切り松林を歩いて、国道にと戻ってきた。バスに乗り、汽車に乗って東京に帰る。もしかすると重い殻を背負って海へと急いでいたヤドカリの健康な走りに、生きることへの迷うことなき逃走に、僕は少しだけ羨望の思いをもっていたのかもしれない。

迎え入れてくれる海を目ざして走っていく、それは僕たちがすでに失ってしまった逞しさであるように思えた。僕たちはいつごろから、生きようとする衝動をこれほどまでに失ってしまったのであろうか。まるで生きることが憧れではなくなってしまったようだ。

現代の僕たちには、生きるという問題が、精神のなかでブラックボックスのように、あるいは空白の円のように広がっているような気がする。ドーナツの輪の上を回るように生活をしているうちに、しだいに真ん中の空白は大きくなってきて、今ではドーナツのような輪も、人がやっと歩けるだけの幅に狭まってしまったような気がする。

そうして、どんなに追いつめられた精神をもっていたとしても、それでも人は生きていけるという単純な事実には僕は落胆するのである。それは人間のもつ本質的な悲しさであるような気がする。戦争のなかで敵を殺したときに喜びを感じるような悲しさを、人はどこかにもっているのである。

人間が肉体的に生きている、それは自分の生命のバランスがまだ保たれているということである。

しかしそれもまた人間の悲しさであった。僕の体に与えられたさまざまな出来事が、体を狂わしていく。しかし人間の体は狂っているなりに、それでも生きようとする自然の力が働いて、体のなかに錘をつくり骨を曲げて、生きるためのバランスをとりつづけていくのである。屈折を重ねながら、どんなにみじめな状態でも人の体は生きていこうとする。

きっと人間の精神も同じことをしているのだろう。どこまで誇りを失っても、どんなにみじめな精神をもっている、屈折したバランスを保ちながら人は生きていけるのである。

海に向かってアスファルトの道を歩いていったヤドカリの姿を、僕は時々思い出す。

彼は生きることへの憧れを、体いっぱいに表示していた。そんなありふれたことに、なぜ僕たちは感動しなければならないのだろうか。

『自然と労働——哲学の旅から』による

注：本文のタイトル「自然と人間」は編集者がつけたもの。